

春ブロッコリー栽培 品質を向上させる管理とは？

春ブロッコリーの栽培時期は、11月～5月頃となり、低温・高温に合わせた管理が必要となります。栽培管理の要点を確認して、品質の良いブロッコリー生産を目指しましょう。

1 育苗期の管理

(1) 温度管理

発芽適温…20～25℃
生育適温…15～25℃
育苗ハウスの温度・湿度の管理、特に温度が安定しないと発芽や生育揃いが悪くなります。

(2) ベト病対策(苗)

ベト病は、20℃前後・多湿条件下で分生子の形成がされやすくなります。特に7～15℃では病原菌が活発になります。育苗ハウス内の発病リスクが高く、注意が必要です。

対策としては、早期の防除が効果的です。大里農林振興センターでは「レーバースフロアブル」を使用した散布試験をしています(写真1)。その結果、発芽後7～9日程度での散布がベト病の発病を抑えることがわかりました。農薬の使用にあたっては、登録情報に基づいて散布を行ってください。



(写真1) 「レーバースフロアブル散布試験」
(左) 発芽後9日処理・(中央) 発芽後7日処理・(右) 無処理

2 生育期の管理(本ぽ)

(1) 換気

換気はこまめに行います。冬場、北西の強風に注意が必要です。換気をする際は、急な温度変化やトンネルが剥がされないよう注意し、風を受ける面の反対側から行います。換気の目安は、トンネル内が30℃を超えないように管理することが好ましいです。

○換気孔がある場合…1月下旬
○換気孔がない場合…1月上旬
生育初期から換気のしすぎは、低温にさらされることで生育遅滞や生理障害の原因になります。ま

た、過度の温度変化は葉柄や軸の裂傷症状、かさぶた症状(ホウ素欠乏)を助長する傾向にあるため、徐々に換気する箇所を増やしましょう。

(2) トンネル除去

トンネル除去が遅れると、高温障害の発生が懸念されるため、3月以降の気温には注意してください。例年3月上中旬が一つの目安になります。ブロッコリーの生育状況によって除去を検討してください。

高温障害により、花蕾の形状が乱れることで、病害の発生が増える場合があります。

3 注意してほしい病害

春ブロッコリーでは、トンネル栽培が行われているため、栽培期間の防除が困難です。換気をこまめに行い、発病しにくい環境づくりが重要です。

(1) 花蕾腐敗病(細菌)

主な病徴は、花蕾が水浸状に腐敗し、腐敗臭を伴う場合があります(写真2)。花蕾形成期に曇天や降雨、窒素過多などで発生を助長します。

(2) 黒すす病(糸状菌)

主な病徴は、下位葉・上位葉・花蕾・葉柄などに黒色小斑点が生じます(写真3)。

降雨と強風により、発病が拡大する傾向にあります。水滴や泥はねを介して、下葉の斑点から上位葉や花蕾などへ感染が広がるため、下位葉の感染を抑えることが重要です。トンネル除去後は殺菌剤を散布しましょう。毎年、発病が多い場合には、定植前に苗かん注処理を行い対策しましょう。



(写真2) 花蕾腐敗病



(写真3) 黒すす病